

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320060

研究課題名(和文) 英文学教育の理念・目的および方法に関する体系的研究

研究課題名(英文) Systematic researches on the ideals/purposes and methods of English literature education

研究代表者

高橋 和久 (Takahashi, Kazuhisa)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：10108102

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究をつうじてわれわれは、大学教育のなかで教育目標の明確化(とくに就業力との関連で)が求められてきている現状を踏まえ、(1)かつて教養主義という名のもとにほとんど自明とされていた英文学教育の理念・目的を、学生の就業力養成と関連させながら再構築し、(2)その理念・目的を実現するための英文学教育の具体的な方法論と教材を開発するとともに、(3)そのような英文学教育の理念・目的と連動する英語教育の方法論と教材を開発したうえで、研究の成果を日本英文学会の活動をとおして発信することをめざした。

研究成果の概要(英文)：Through the researches, we attempted, in the light of the fact that we were expected to clarify the goals of education on the university level, (i) to reconstruct, in relation to career education, the ideals and purposes of English literature education, which used to be taken for granted as an elementary liberal arts subject, (ii) to develop concrete teaching methods and materials to attain our ideals and purposes of English literature education, and (iii) to develop, as well, teaching methods and materials of English language education in conjunction with those ideals and purposes. We also attempted to publish the results of our researches through the activities of the English Literary Society of Japan.

研究分野：英文学

キーワード：英文学教育 英語教育 教育理念 教育方法

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、英文学研究者の多くは、教養主義というかたちで曖昧に規定する以外には、英文学教育の意味をほとんど問うことがなかった。すなわち、英文学教育の教養主義的意味を十分に明確化する努力を怠ってきたうえに、それ以外のかたちで英文学教育の意味を問うことをほとんどしてこなかった、ということである。英文学教育の意味を問うてこなかったということは、その前提として、英文学研究の意味を問うてこなかったということをも意味するだろう。1990年代以降、教養主義と人文学の退潮、英語教育におけるいわゆるコミュニケーション能力の重視、それにとまなう英文科解体、そして大学の英語教育ポストからの英文学研究者の締め出しという状況が急速に進行してきたにもかかわらず、われわれが英文学研究・英文学教育の意味・理念・目的を明確化し、それを社会にたいして公表する十分な組織的努力を怠っていたのである(少数の個人による散発的な努力はたしかにあったが)。

平成22年2月25日付の大学設置基準の改正(第42条の2「大学は、[中略]学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を、教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう[中略]適切な体制を整えるものとする)は、そのような英文学教育の現状を厳しく問うものだった。それは第一に、「大学及び学部等の教育上の目的」を、「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力」、とくに就業力(社会人基礎力)との関連のなかで具体的に定義することを求めていたが、この要請は、われわれが、たんなる曖昧な教養主義的定義をこえて英文学教育の「教育上の目的」について定義することを、これ以上先延ばしすることなく開始しなければならないということを確認に示していた。それを英文学研究者の共通の問題として定立したうえで、そのような方向でなされているこれまでの個々の努力を組織化し、体系化していかなければならないということを示すことになったのである。

2. 研究の目的

(1) かつて教養主義という名のもとにほとんど自明とされていた英文学教育の理念・目的を、学生の就業力養成と関連させながら再構築する

(2) その理念・目的を実現するための英文学教育の具体的な方法論と教材を開発する

(3) そのような英文学教育の理念・目的と連動する英語教育の方法論と教材を開発する

(4) 以上の研究の成果を、日本英文学会を中心とした英語教育に関する組織的体系的研究の第一歩とするような体制をつくる

3. 研究の方法

(1) 毎年度、日本英文学会の全国大会・支部大会(関東支部、中四国支部、東北支部、北海道支部)、ないし個別作家の学会の大会などにおいてシンポジウムを組織し、それにむけて研究会を開催しながら原稿を準備する

(2) 4年で合計7回にのぼるシンポジウムを企画開催したが、そのようなシンポジウムには、本科研メンバーがパネリストとして、また、フロアから積極的に参加すると同時に、自薦他薦の適任者を適宜講師として招き、なるべく多様な観点から有益な示唆を受けられるようにする

(3) 日本英文学会関東支部のなかで「英文学教育叢書」シリーズを計画し、本研究の研究成果をその創刊号に集約するとともに、今後、英文学教育を組織的体系的に研究していくための体制をつくりあげていく

4. 研究成果

(1) 全国の国公私立大学で英文学教育の組織を有している大学すべてのディプロマ・ポリシー等を参照しながら、英文学教育の理念・目的についてさまざまな可能性を検討した。それを列挙すると、専門知識、幅広い人文学的教養(人間性への探求)、人格の陶冶、高度な英語力(コミュニケーション能力)、異文化への理解力と国際的視野、(母語をふくむ)言語能力、論理能力(論理的読解力・思考力・表現力)、課題発見力・課題解決力、ということになった。以上を踏まえてわれわれは、英文学教育の理念と目的を便宜上4つのカテゴリーに分けることにした [1] 言語能力およびそれと一体化している論理能力の養成、[2] 英語能力の養成、[3] 社会人としての教養の養成、[4] 文学研究者としての研究能力の養成。

そのうえでわれわれは、社会が実利的な傾向を帯びるようになって以来、英文学教育をはじめとする人文学教育への社会的期待が急速に低下しつつある現状を踏まえ、教養主義的理念に加えて、就業力との関連という観点から、英文学教育のより実践的な理念・目的として、高度な言語能力・コミュニケーション能力の養成および言語能力と密接な関連のある論理能力(これは課題発見力と解決力の基盤となる)の養成という理念・目標を掲げ、そのような理念・目標にもとづく英文学教育の方法論・教材の開発をめざすことを確認した。そしてその観点から、そのような能力を養成する方法としてのアクティヴ・ラーニングの授業への導入方法を検討するとともに、そのような能力を適正に評価するための、学生の論文・レポートについての統一的な評価基準(originality, evidence, research, expression, quotationの5項目からなる)を作成した。

(2) われわれは、以上のような理念・目標に合致する英語教育の方法論を研究し、いわゆる「コミュニケーション」型の英語教育と相補的となるべき英語教育の可能性とその方法論を提示した。すなわち、多くの社会人にとって、コミュニケーション能力というのが、英語による日常的コミュニケーション能力（日常的英会話）のことではなく、言語を論理的に理解しそして表現する能力、自分の言いたいことを適切に伝え、他人を説得し、また、さまざまな意見を調整して合意を形成する高度な（論理的な）コミュニケーション能力のことであるとすれば、英文学研究が英語教育に貢献できる余地がまだまだたくさんあるという前提に立って、そのような英語教育を実現するための英語リーディング授業のさまざまな具体的方法論を提言した。

いわゆるコミュニケーション英語という理念が否定される必要はないが、その理念のみが小学校から大学までの日本の英語教育の現場を覆ってしまうのは、英語教育の貧困化、言語教育の貧困化、教育の貧困化を招来することになるのではないかと。われわれも、われわれなりの、英文学教育と結びつくかたちでの英語教育の理念・目標、母語教育と連動する言語教育の理念・目標を掲げるのみならず、それを具体化するためのカリキュラムや教材や教授法を具体的に検討・開発し、そのための人材を育成しつつ、社会にむけてわれわれの英文学教育と英語教育の全体像を発信していく義務があることを、日本英文学会のメンバーにたいして強調した。

(3) 特定の作家の特定の文学作品、ないし特定の映画作品を材料にして、言語能力・論理能力の養成というわれわれの理念・目標を実現するために、どのように授業を進めていけばいいかを議論した。その際にわれわれがとくに留意したのは、われわれの理念・目標を実現するためにはアクティヴ・ラーニングの要素を授業に導入することが死活的に重要な鍵となるという前提に立って、具体的な作品のどのような箇所をどのようなかたちでとりあげることによって学生をディスカッションへと誘導できるか、どのような課題をあたえることによって、文学作品についての論理的なプレゼンテーションないしレポートの作成へと学生を誘導することが可能になるかということだった。

このような観点は、従来の日本の英文学教育論には決定的に欠如していたものであったが（英文学教育のための本といえば、伝統的に英語の精読のための語注付の英語テキストだった）それゆえ、今後、そのようなアクティヴ・ラーニング的な観点をもった教材の作成を組織的に進めることの必要性が確認されることになった。アクティヴ・ラーニング的な授業例のひとつとして、オスカー・ワイルドの「幸福の王子」をあつかった

阿部公彦の発表要旨を以下に引用しておく。

「本発表ではオスカー・ワイルドのテキストをいかに英語教育に生かすかということについて検討した。筆者の専門は詩だが、「幸福な王子」はしばしば「児童文学」というカテゴリーに入れられることの多い作品でもあり、詩の合間に読むと、韻文、散文、童謡といったジャンルの境目を意識させるのにちょうどいいということがある。

その際のキーワードとなるのは「真心」である。この作品をごく単純に通俗的に読むと「心をもっているはずの人間にこころがなく、こころがないはずのツバメや銅像にこころがある」という「美しい皮肉」が読み取れるということになるだろう。最近出たある翻訳のあとがきで訳者Sは「削ぎ落とされた真実のみ描く」というようなことを言っている。このようなコメントが的外れであるかどうかはとりあえず置くとして、授業ではこのテキストを大人が子どもに勧める際に陥りがちな浅薄な道徳主義に流れるのではなく、実際に何が読み取れるのか、テキストと向き合うための練習を心がけた。

その際に注目したのは王子とツバメそれぞれの言葉の使い方である。たとえば王子の言葉はきれいな対関係を成すことが多いが、ここからはいったい何が読み取れるか。ふつうなら対関係は文章に安定感をもたらすはずである。18世紀流の洗練された英語の特徴として、ああでもない、こうでもないと対関係を示唆しながらバランスを取るといったことがあった。しかし、ここではそうした知性主義よりも、十把一絡げで話をまとめようとする邁進感のようなものが読み取れると思える。それはなぜか？むしろ、これは私たちの真理語りのレトリックに照らしてみると、あまりに表層的で嘘っぽく聞こえる語りなのではないか？

しかし、このように表層性にこそ「真心」がある、と示すところにこの作品のおもしろさがあるのかもしれない。そこでさらにツバメの言葉の使い方に注目すると、なぜかツバメは「考えはじめると眠くなる」のだという。どうしてだろう。頭が悪いから？考えることに慣れていないからか？おそらく一番重要なのは、ツバメのことはそのものが考えることに慣れていないことではないかと思われる。それでツバメの言葉にあらためて注目してみると、一見、ただだらと長く、自分に酔っているように語られている。と同時に、非常に平坦。まるで言葉の手綱をぎゅっと握るはずの「主体」がどこかに消えてしまったかのようで、言葉だけが一人歩きてしているという印象を与える。

ここにも今一つの表層性が確認できる。このあたりを元にして、なぜ表層性と真心がみ合うのか、という問題をあくまで言葉の問題として学生さんに考えてもらうというような授業をやってみた、という話である。」

(4) われわれは、また、MLA Approaches to Teaching World Literature シリーズ (個別の作家・作品を主題にして110巻以上が出版されている)の検討も、われわれの重要な課題のひとつとして進めた。ひとつにはそれが、アメリカの文学教育が MLA (The Modern Language Association of America) によって組織的に進められることによって、いかに優れた教材を生み出すことに成功しているか、そしてアメリカの教育者たちがいかに教材を共有しあうことによって体系的な文学教育を実践しているかを示しているからであり(われわれはそれが日本において日本英文学会が果たすべき役割だと提言している)もうひとつはそれが、アクティヴ・ラーニング的な要素を導入した英文学教材を構想するにあたってひじょうに参考になる教材となっているからである。

しかしその一方で、アメリカの英文学教育の成果がそのまま日本の英文学教育に役立つのかといえ、かならずしもそうはいえない。MLA Approaches to Teaching World Literature でさえそのまま日本では通用しないのである。なぜならば、アメリカの学生と日本の学生とでは、当然のことながら英語圏の文化的リテラシーにはかなりの差があるからである。また、もしも英語能力の養成が日本の英文学教育の重要な柱とならなければならないとすれば、日本の英文学教育教材にはそのような観点からの記述も必要となるだろう。

以上のような検討の成果は、現在、日本英文学会関東支部のなかで進んでいる「英文学教育叢書」シリーズの編集に直接的に反映されている。長年、英文学関連の出版に携わってきた優秀な編集者にも加わってもらいながら、現在、その第一巻目の刊行準備が進められている。これは関東支部が中心になっているが、もちろんほかの支部のメンバーにも加わってもらいながら、MLA Approaches と同様、シリーズものとして持続的に出版され、日本における英文学教育の組織化の中心的役割を担うものとなっていくだろう。その結果としてこのシリーズは、個々の研究者の努力を組織化することによって英文学教育が継続的に発展することと、その成果が共有されることによって英文学教育が一定の教育的効果を達成することを保証することになるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

Noriyuki Harada, "Teaching Eighteenth-Century English Literature: Purposes, Curricula, and Syllabi" (査読あり) *The Liberlit Journal of Teaching Literature*,

Vol. 1 (Web Journal: <http://www.liberlit.com/teaching-eighteenth-century-english-literature-in-japan-purposes-curricula-and-syllabi-2/>), 2014, 15p. (総印刷頁)

Noriyuki Harada, "Translation and Transformation of Jonathan Swift's Works in Japan", *The First Wit of the Age: Essays on Swift and His Contemporaries in Honor of Hermann J. Real* (査読あり) (Frankfurt am Main: Peter Lang, 2013), pp. 315-28

[学会発表](計16件)

高橋和久「小説における作中人物のふるまい」東京大学英文学会総会、2015年3月28日、東京大学本郷キャンパス(東京大学文京区)

阿部公彦、ほか2名「いま外国文学を教えるということ」、司会=海老根龍介、日本フランス語フランス文学会関東支部シンポジウム、2015年3月7日、白百合女子大学(東京都調布市)

原田範行「英文学の社会貢献」、日本女子大学学術交流研究講演会、2015年3月7日、日本女子大学(東京都文京区)

高橋和久「過去とどう付き合うか 20世紀英国小説つまみ食い」、神戸外国語大学英米学会、2014年12月13日、神戸外国語大学(兵庫県、神戸市)

高橋和久、阿部公彦、丹治愛、原田範行、ほか1名「文学史を書くこと、文学史を教えること」、司会=丹治愛、日本英文学会北海道支部第59回大会シンポジウム、2014年10月25日、北海道武蔵女子短期大学(北海道、札幌市)

Noriyuki Harada, "English Literary Education in Japan", Bucknell Interdisciplinary Academic Symposium, 16/09/2014, Bucknell University (USA)

高橋和久「英文学から何を学ぶか ディケンズ『荒涼館』を一例に」、早稲田大学英文学会(文学学術院)・英語英文学会2013年度合同大会、2013年12月14日、早稲田大学(東京都、新宿区)

高橋和久、「テキストを自由に読む『1984年』を例に」、和洋女子大学大学院人文科学研究科講演会、2013年11月29日、和洋女子大学(千葉県市川市)

丹治愛、原田範行、ほか2名「英文学教育における映像の文法」、司会=岩田美喜、日本英文学会東北支部特別シンポジウム、2013

年 11 月 24 日、東北工業大学(宮城県仙台市)

高橋和久、阿部公彦、ほか 2 名「古典の困難 それでも、やっぱり、教えたいたい?」、司会 = 阿部公彦、日本英文学会関東支部秋季大会シンポジウム、2013 年 11 月 2 日、日本女子大学(東京都文京区)

阿部公彦、丹治愛、原田範行、ほか 1 名「ワイルド作品を教育に活用する」、司会 = 原田範行、日本ワイルド協会第 37 回大会シンポジウム、2012 年 12 月 1 日、慶應義塾大学日吉キャンパス(神奈川県横浜市)

丹治愛、ほか 4 名「英語リーディング教授法の多様化のなかで 文学研究者に存在意味はあるのか」、司会 = 丹治愛、日本英文学会中国四国支部シンポジウム、2012 年 10 月 28 日、高知大学(高知県高知市)

高橋和久「英文学を学ぶ/教えることハーディを経由した詩人を経由して」、日本ハーディ協会第 55 回特別講演、2012 年 10 月 13 日、武庫川女子大学(兵庫県西宮市)

丹治愛、ほか 2 名「外国語外国文学会の現下の課題」、司会 = 丹治愛、日本英文学会第 84 回全国大会特別シンポジウム、2012 年 5 月 27 日、専修大学生田キャンパス(神奈川県、川崎市)

丹治愛、原田範行、ほか 2 名「学会は研究・教育のために何ができるか? 日本英文学会関東支部の将来構想」、司会 = 原田範行、日本英文学会関東支部 4 月例会特別シンポジウム、2011 年 4 月 30 日、成蹊大学(東京都、武蔵野市)

〔図書〕(計 8 件)

原田範行『風刺文学の白眉 「ガリヴァー旅行記」の世界』(NHK 出版、2015) 157 頁

阿部公彦『英語的思考を読む』(研究社、2014) 213 頁

阿部公彦『詩的思考のめざめ』(東京大学出版会、2014) 218 頁

原田範行、服部典之、武田将明『「ガリヴァー旅行記」徹底注釈』注釈篇(岩波書店、2013) xiv+593+23 頁

富山太佳夫『文学の福袋(漱石入り)』(岩波文庫、2012) 368 頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 和久(TAKAHASHI KAZUHISA)
東京大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号: 10108102

(2) 研究分担者

阿部 公彦(ABE MASAHIKO)
東京大学・人文社会系研究科・准教授
研究者番号: 30242077
富山 太佳夫(TOMIYAMA TAKAO)
青山学院大学・文学部・教授
研究者番号: 70011377
丹治 愛(TANJI AI)
法政大学・文学部・教授
研究者番号: 90133686
丹治 陽子(TANJI YOKO)
横浜国立大学・教育人間科学部・教授
研究者番号: 90188459
原田範行(HARADA NORIYUKI)
東京女子大学・現代教養学部・教授
研究者番号: 90265778

(3) 連携研究者

()

研究者番号: